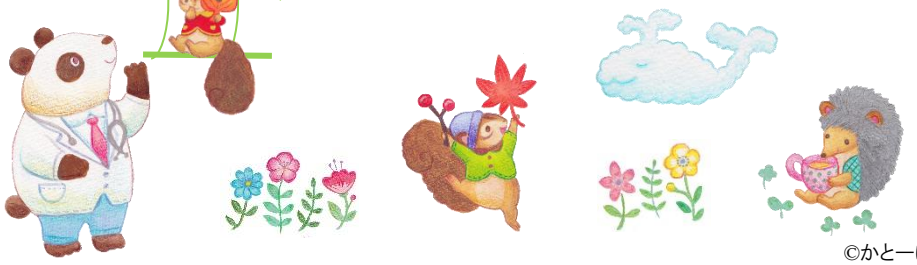
Online ISSN 2433-2070

JCCG Press

Vol.7

Japan Children's Cancer Group News Letter

小児がんの子どもたちを救おうと 全国から医療の専門家が結集しました



©かとーゆーこ

第 7 号
発行日 2018 年 10 月 4 日
NPO 法人
日本小児がん研究グループ
JCCG 発行

小児がんの子どもたちへ JCCG の 3 つのミッション

① すべての命を救おう

② ずっと支えよう

③ 未来につなげよう

日本小児がん研究グループ（JCCG:Japan Children's Cancer Group)は、子どもがかかるがんの治療を研究開発するグループです。2014 年に小児がんを専門とする医療者がオールジャパンで集まり、結成しました。JCCG への参加施設（主に病院）は約 200 施設です。各施設のドクターを中心に、多くの医療者が JCCG として治療研究に携わっています。

① すべての命を救おう

子どもには、大人とは性質の異なる多くの種類のがんがあります。残念ながら小児がんが原因で命を失う子どもたちもいます。私たちは子どものかかるすべてのがんについて、生存率を向上させ、副作用を減らす治療方法を開発します。

② ずっと支えよう

小児がんは厳しい治療が必要なケースもあり、治療後も、体調の変化・不安な気持ちなどへの細やかなフォローが必要です。私たちは子どもたちの長い人生を見守ります。

③ 未来につなげよう

子どものがんの原因は大人のがんとは異なることが多く、遺伝子解析など最先端の研究が必要です。私たちは全国から情報を一か所に集めてエキスパートが治療方針を検討する仕組みや、患者データや検体を保存・共有するシステムを構築しました。JCCG という一つの大きな小児がん専門病院があるイメージです。オールジャパンで最先端の診断・治療を行い、よりよい治療につながる研究を推進していきます。

研究を進める専門委員会と特別会議

※委員長

◆病理診断委員会
※中澤温子（埼玉県立小児医療センター）
◆画像診断委員会
※宮嵜治（国立成育医療研究センター）
◆外科療法委員会
※田口智章（九州大学）
◆造血細胞移植委員会
※加藤剛二（名古屋第一赤十字病院）
◆放射線療法委員会
※正木英一（亀田総合病院）

◆長期フォローアップ委員会
※前田美穂（日本医科大学附属病院）
◆支持療法委員会
※福島啓太郎（獨協医科大学病院）

◆分子診断委員会
※滝智彦（杏林大学）
◆生物統計委員会
※嘉田晃子（名古屋医療センター）
◆ゲノム医療推進コアメンバー会議
※水谷修紀（JCCG 理事長）

シリーズ ～小児がん拠点病院～

第３回 東北大学病院

「東北大学病院」 仙台市青葉区星陵町

仙台七夕まつりは、伊達政宗の時代から続く伝統行事として受け継がれ、毎年 8 月 6～8 日に開催。その時期は、院内でも笹飾りや吹き流しが飾られます。小児科病棟での「七夕夏祭り」も恒例行事です。

子どもたちの願い・祈りに寄り添って

短冊の願い事を見るといつも胸がいっぱいになります。子どもたちの願いやご家族の祈りを、できる限りかなえられる医療者・病院でありたいと日々努めています。

東北地域の小児がん医療は、東北大学病院と、小児がん診療病院 9 施設（図①～⑨）が担っています。東北大学病院では年間約 50 名の新たに発症した患者さんを治療しています。

小児科病棟医長　力石　健　医師（左）
小児科　渡辺　祐子　医師

活発なカンファレンス

みんなでその子のベストを考える

①Pediatric Oncology Conference（POC）
関連科の医師間で小児がん患者の診断と治療方針の決定・経過報告を行う
（小児科医・小児外科医・整形外科医・放射線科医）

②小児がん総合カンファレンス
小児がん患者の病状経過の情報共有をし、精神的社会的面の対応を検討する
（小児科医・看護師・院内学級教師・保育士
臨床心理士・医療ソーシャルワーカー・CLS）

笹原医師：東北大学病院では、多職種カンファレンスに力を入れています。週に 1 度、月に 1 度などそれぞれの頻度で 10 種類のカンファレンスを行っています。

小児科医・看護師・医療ソーシャルワーカー・CLS（チャイルド・ライフ・スペシャリスト）らそれぞれが患者さんの情報を持ち寄り、その子にとってよりよい治療や過ごし方を検討しています。

例えば夏休み前の小児がん総合カンファレンス（②）では、院内学級教師が「『宿題が足りない』と言うほど勉強に意欲的です」、保育士が「寝入る時に少し呼吸が苦しそうです」、小児科医が「比較的症状は落ち着いています」など各々の立場からの報告をし、それを皆で共有し、その子の理解を深めました。複数科や職種間の横のつながりを強化して、その子のベストを提供しています。

小児科准教授
笹原　洋二　医師

伝統的な強み ＆ 新しい治療の開発

脳神経外科

脳神経外科の歴史や新しい臨床試験について、齋藤竜太医師にお話をうかがいます。

50 年を越える歴史

東北大学病院の脳神経外科は、脳研脳神経外科として開講以来、2014 年に 50 周年を迎えました。これまでに同科に在籍した医師は 300 名を超え、経鼻下垂体手術（鼻孔から脳底部腫瘍の摘出を行う）を日本で初めて実施したことや、「もやもや病」という脳血管障害を「Moyamoya Disease」と世界共通の病名にしたこと、脳腫瘍に対する覚醒下手術（手術中に患者さんの意識を覚醒させ、電気刺激や患者さんとの会話で腫瘍の位置を確かめ、言語の機能を落とさないよう少しずつ腫瘍を摘出する）の発展に寄与したことなどで知られています。

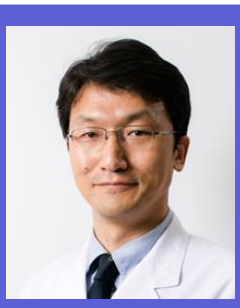
小児科との連携による小児脳脊髄腫瘍治療体制の強化

もともと同科は「患者さん中心主義」を貫き、幅広い脳神経の病気に適切・的確な医療を提供するために、さまざまな科との連携体制を整えていました。東北大学が小児がん拠点病院となり、小児科との連携が進んだことで、「大量化学療法」（骨髄を破壊してしまうほどの量の抗がん剤を投与する治療法。抗がん剤が届きにくい脳腫瘍では有効）など、より高度な治療を提供できる体制が確立しました。子どもたちが一般的な胃腸炎や風邪の症状で調子をくずした時には、これまで診療科間で必要だった紹介手続きなどをせずに、スムーズに対応できるようにもなりました。

子どもたちやご家族にとっては、入院病棟が小児病棟になったことが大きいと思います。小児病棟にはプレイルームや交流スペースがあり、病棟保育士さんのサポートでご家族が少し自由な時間を持つこともできます。

情報共有でベストな診療を

脳神経外科医が加わる多職種カンファレンスには「小児脳腫瘍」「神経画像および放射線治療」「脳腫瘍病理」「神経放射線」などがあります。「神経放射線カンファレンス」は、近隣他施設の医師も参加する希少症例や難解な症例の検討会です。常に多くの目で情報を共有することで、診断の難しい症例を減らし、ベストな治療ができるようになると思います。



脳神経外科
齋藤　竜太　医師

医師主導治験：CED（※）を用いたニムスチン塩酸塩局所投与
～脳幹部神経膠腫に新たな治療を～

脳幹部に発生する「脳幹部神経膠腫」は、治療がかなり難しい脳腫瘍です。部位的に手術が困難で全身化学療法の効果も認められず、現在有効とされているのは放射線治療のみです。全国で年間 60～100 例程度の希少疾患でもあります。

東北大学脳神経外科では、この脳腫瘍に対して薬剤を局所投与する新たな治療方法の開発を基礎研究段階から行い、再発した病気には効果があることを確認しました。現在、この方法を実際の「治療」とすることを目指して、有効性と安全性を検証する医師主導治験を開始しました。　※CED：脳に細い針を刺し、針の先から抗がん剤を注入する方法

サポートはさまざま　将来の可能性、体の動き、学習…

宮城県がん・生殖医療ネットワーク

「妊娠の可能性を残したい」に応える

「子どもがほしい」願う声は全国で

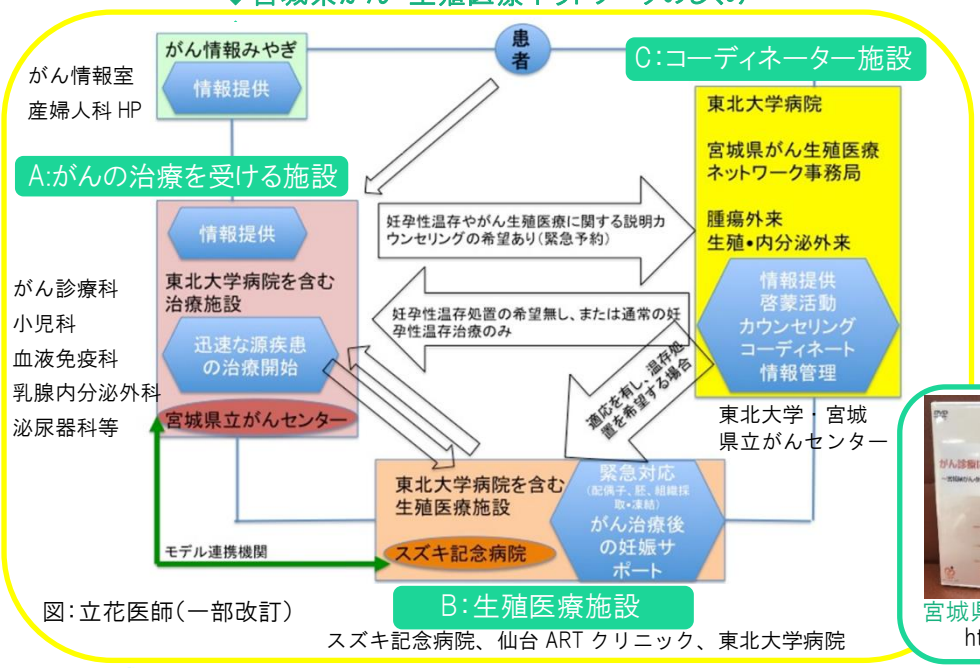
今年 6 月、兵庫県議会で若いがん患者に妊娠・出産の道が開かれることを願う意見書が出され、話題となりました。肝臓がんのため 25 歳で亡くなった前田（旧姓 山下）弘子さんの「子どもがほしかった」との思いを受け、夫の前田朋己議員が訴えたものです。弘子さんのような AYA 世代（**A**dolescent and **Y**oung **A**dult＝思春期と若年成人：10 代半ばから 30 代を指す）のがんが注目されるようになり、妊娠の可能性を残したい若い患者さんへの対応も近年の大きなテーマとなっています。

「がん生殖医療」とは、がんの治療（手術、化学療法、放射線療法）によって、将来の妊よう性（妊娠のしやすさ）が失われたり、子どもをもつための生殖機能が低下したりする可能性がある場合に、妊よう性を温存する医療です。

東北大学病院産婦人科　立花眞仁医師らは、同大学と宮城県立がんセンターがコーディネーター施設となり、「患者さん」・「患者さんががんの治療を受ける病院」・「生殖医療を受ける病院」それぞれの情報を統括し、患者さんの相談を受けられるシステムを構築しました。患者さんが生殖医療を希望した時、迅速かつスムーズに治療に入れるようサポートします。

立花医師：近年受精卵、精子や卵子の凍結技術が進んだため、がんの治療の影響を受ける前に生殖機能を温存することが可能になってきました。多くの施設の協力を得て下図のようなネットワークを構築しましたが、県沿岸部との連携がまだ十分でないなど課題もあります。また、このネットワークが本当に患者さんの役に立てているかどうかが最も重要なところです。コーディネーター施設として集めるデータをよく精査し、がん生殖医療の発展につなげていきたいと考えています。

◆宮城県がん・生殖医療ネットワークのしくみ



図：立花医師（一部改訂）

産婦人科
立花　眞仁　医師

東北大学病院は DVD「がん診療における妊孕（よう）性温存」を作成。生殖医療についてわかりやすく説明されている。近く同病院産婦人科 HP で閲覧可能になる。

宮城県がん・生殖医療ネットワーク URL
http://www.ob-gy.med.tohoku.ac.jp/

セミクリーンエリア

治療中の子どもたちの「動きたい」に応える

セミクリーンエリア　小児科の西病棟奥にある

東北大学病院には、高性能フィルターで浄化した空気を送り、細菌やウイルス、カビなどの微生物で子どもたちが感染するリスクを減らす「セミクリーンエリア」があります。

抗がん剤治療や移植治療を受けると免疫力が下がり、感染リスクが高まります。そのため、移植後のお子さんや骨髄抑制（骨髄がダメージを受け、血液成分をつくる働きが正常に機能しなくなること）が続くお子さんは、感染を避けるためにベッド上での安静を余儀なくされていました。

しかしセミクリーンエリアの個室、プレイルーム、廊下では、あまり感染症を心配せずに過ごせるため、リハビリもできるようになりました。

子どもたちへのリハビリ

子どもたちの回復に、リハビリの果たす役割は特に大きいそうです。理学療法士の齋藤悟子さんにお話をうかがいます。

リハビリを担当するのは、主に運動能力や姿勢にアプローチする「理学療法士」、指先の動きなど日常の作業を担当する「作業療法士」、発声や食事、飲み込みの問題などにも対応する「言語聴覚士」です。チームを組んで動いています。

私たちの子どもたちに対するリハビリは、大人向けに「さあ筋トレをしましょう」という風には始めません。「ねえ、どこかに行ってみない？」と誘って歩く、「17 階にジャングルジムがあるから見に行かない？」とベッドから離れるように促すなど、自然なスタンスを心掛けています。

子どもたちはいつも頑張っているので、頑張ってできるという成功体験も大切にしながら、無理をしすぎて痛みが出たりしないよう、ブレーキをかけることもあります。

一人一人の退院後の生活を、学校の階段の段差や移動教室の距離等具体的に想定し、困らないためには何を伸ばしていけばよいのかを考え、リハビリの内容を検討しています。

理学療法士
齋藤　悟子さん

医学部生による学習サポート

入院中の高校生の「学びたい」に応える

7 月 26 日 16 時、小児科病棟のベッドサイドで英語の授業が始まりました。教えるのは山内紗理さん（東北大学医学部 3 年生）、生徒は入院中の高校 3 年生の女の子です。学校で配布されたプリントを使い、英文法を学んでいきます。山内さんは女の子のペースに合わせ、単語の意味にはヒントを出したり、長文はじっくり一緒に考えたり。

「あ、そうか！」わかった瞬間女の子からは嬉しそうな笑みがもれました。「入院していても、何もしないよりはできる勉強をする方がいいし、みんなが学校で解いているプリントの内容を教えてもらえると安心できます。先生の年齢が近いので話しやすく、勉強の合間のおしゃべりも楽しいです」と高校生は話してくれました。

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z !

このような長期入院中の高校生の学びを支えているのは、東北大学医学部生有志による学習支援サークルです。現在 10 人のメンバーが登録しています。丸山泰さん、大島隆寛さん、勝又遥子さん、山内紗理さんにお話をうかがいました。

勝又　遥子さん、大島　隆寛さん、山内　紗理さん、丸山　泰さん
（4 年生）　（4 年生）　（3 年生）　（4 年生）

おそろいのスクラブ（半袖で首元が V ネックとなっている医療用ウェア）をユニフォームに。子どもたちが圧迫感なく受け入れてくれるよう相談し、うさぎ柄をセレクトしたそうです。

きっかけはグループワーク・子どもたちの意欲に驚き

丸山：活動を始めたきっかけは、医学部 2 年生時のグループワークで小児科系の問題を話し合ったことです。指導医の先生から「高校生には院内学級がない。入院中の彼らに勉強を教える講師がいれば」という話を聞き、「やるか」と友人に声をかけ、6 人でスタートしました。

始めてみて、高校生らの意欲には驚いています。学習塾での指導経験もありますが、比較すると「学びたい」という欲求がより強く、入院や治療の経験を将来についてしっかり考えるきっかけにしている子もいます。その前向きなエネルギーは、本当にすごいな、と思います。

活動の意義

大島：理系に興味があると「科学者を育てる企画」に積極的に参加するなど、自分のやりたいことがしっかり見えている子が多いと感じます。教えている最中によく質問をされます。質問の数がかなり多いのも一般塾との違いです。「こういう活動がなかったら質問の機会もなかったのかな」と思うと、活動の意義を感じます。また、まだ完全に医療者ではなく、親戚でもない立場で患者さんと会話をし、互いに気持ちが分かり合えるという経験は、この取り組みでないとできないかもしれません。

忘れられない言葉

山内：4 人部屋でのことです。隣りのベッドの小さい子が治療のつらさで大声で泣いてしまい、その声を聞きながら勉強していた時がありました。教えていた子が、「泣いていてもしょうがないから泣かないようにしたんだよね。後ろを見ても仕方がないから前しか向かない」と話してくれました。自分なんかよりよっぽど強いな、と思いました。例えば 2 週間後に試験が迫っているだけで弱ってしまいそうな時など、折に触れてその言葉を思い出します。今までで一番心に残った言葉です。

必要とされている実感

勝又：一般の塾との一番の違いは子どもたちの体調に波があることです。でも、「今日は具合が悪いから短時間でお願いします」「感染予防のためにしっかりガウンを着てやりましょう」など、授業を延期にはせず、何とか工夫して対応します。それだけ望まれているのだと感じます。

一度お礼の手紙をいただいたことがあり、今でも大切にしています。これまで勉強を教えるアルバイトを経験してきて、ここまで感謝していただけるのは初めてで、本当に嬉しく思いました。同時にやはりそれだけ必要とされているのだと実感しています。

「教えている自分たちが教えられている」 メンバー全員が、病院で学ぶ高校生への敬意と学習支援の意義を語ってくれました。

11 月は京都へ　小児がん関連学会続々

小児血液疾患と小児がんの医療の向上に寄与することを目的とする「第 60 回日本小児血液・がん学会学術集会」（会長：細井創）が、11 月 14 日(水)～16 日(金)の 3 日間、京都市のロームシアター京都・京都市勧業館みやこめっせを会場に開催されます。「第 16 回日本小児がん看護学会学術集会」「第 23 回公益財団法人がんの子どもを守る会公開シンポジウム」も共同開催されます。

さらに、日本では 20 年ぶりの開催となる国際小児がん学会（SIOP）の第 50 回記念大会（会長：中川原章）が同月 16 日（金）～19 日（月）の 4 日間、国立京都国際会館で開かれます。

いずれも多彩なプログラムが用意されており、小児がん医療発展の大きな契機となりそうです。

第 60 回日本小児血液・がん学会学術集会

【テーマ】Children First! 難病の子どもたちが教えてくれる未来の医療、未来の社会

【主なプログラム】厚生労働省より医務技監を招いての特別企画「医療の構造改革 変わるのは、今だっ！」、米国テキサス大学ヘルスサイエンスセンターより Dr. Peter J. Houghton を招いての海外招聘講演、高松宮妃癌研究基金学術賞受賞者による特別講演、3 つの学会と CCI（国際小児がん親の会連盟）による公開パネルディスカッションなど。

「脳腫瘍」をテーマにした日韓ジョイントシンポジウム、「神経芽腫臨床」がテーマのアジアセッションなど、アジアの小児がん医療を牽引する日本開催ならではのプログラムも豊富。京都という土地柄を生かし、華道家元池坊・次期家元 池坊専好さんによるいけばなの立花パフォーマンスも開催。平安神宮など京都を代表する神社仏閣の秋の風情を味わうチャリティーウォーキングも目玉の一つ。

◆その他詳細は同学術集会 HP へ：http://www.c-linkage.co.jp/jspho2018/program.html

今学会のテーマにある「Children First!」（チルドレン・ファースト）、それは単に「子どもが最優先」というだけでなく、「困難な状況にある子どもの医療や教育のあり方を通して、医療や社会のあり方を考えていくことが、よりよい未来づくりの原点だ」というメッセージを込めています。

病気や障がいを持った子どもたちこそ、真摯に向き合うことで、我々をよりよい未来に導いてくれる光そのものであると考えます。難病の代表の一つである小児がんや血液疾患に対する「基礎研究」、多診療科・多職種による「集学的治療」、患者家族・教育者・行政など社会全体を巻き込んだ「トータルケア」は、「小児」や「がん」に限らず、すべての医療や福祉、よりよい社会・地域づくりにつながる、未来志向の取り組みです。

今回の記念大会開催を契機に多くの医療者や研究者、小児がん経験者やその家族が集い、交流が促され、小児がんの医療の向上はもちろん、より良い未来の医療と社会づくりの一つにつながることを期待します。

日本小児血液・がん学会
理事長、同学術集会会長
京都府立医大 小児科
細井 創 医師

第 50 回 国際小児がん学会 （SIOP）

SIOPは、「International Society of Paediatric Oncology」のフランス語の略称で、世界各国の小児がん専門の医師、看護師や医療者の学会です。会員数は 1500 人以上。毎年各国で世界大会を開きます。昨年はアメリカ合衆国：ワシントン D.C.で開催されました。

日本での開催は、1998 年の横浜大会から 20 年ぶりです。SIOP としても第 50 回という節目の大会で、過去最多の参加人数が見込まれています。

SIOP 国内組織委員会委員長
公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団 理事長
中川原 章 医師

「小児血液・がん学会」「JCCG」設立と組織力 日本開催後押し

SIOP の日本開催実現には、日本小児血液学会と日本小児がん学会の統合によるアジア初の「小児血液・がん学会」組織と、小児がん臨床研究組織である「JCCG（日本小児がん研究グループ）」の設立が大きな後押しとなりました。小児がんにかかった子どもたちや親を支え続けている「がんの子どもを守る会」が設立 50 年を迎えていることや、京都の都市としての魅力もアピールポイントでした。

SIOP のオープニングを飾るセレモニーは、「アジア・チャイルドケア・リーグ」、「ハートリンク」など小児がん関連団体の代表者や医師、看護師らさまざまな立場のメンバーが力を合わせて準備を進めています。異なる立場の者が小児がんの子どもたちの明るい未来のために手を携え、組織力を上げていることが、今大会の最大の特徴だと感じています。また、インドを筆頭にアジアからの参加者が多く、日本が小児がん治療のアジアリーダーとして期待されていることも実感します。

ノーベル生理学・医学賞 本庶教授、大隅教授の講演も！

10 月にノーベル生理学・医学賞の受賞が決まった本庶佑（たすく）・京都大特別教授、2016 年同賞受賞の大隅良典・東京工業大栄誉教授それぞれの講演（ノーベル賞受賞者の講演は SIOP 初）など、スペシャルプログラムも多く組まれている魅力的な大会になります。多くの人による協力体制、日本ならではの演出などが、この歴史的な大会を盛り上げ、小児がん克服への動きが加速することを期待しています。

「学会」って、どんなことをするの？「研究グループ」との役割の違いも知りたいな。

「学会」は勉強会をイメージしてください。研究の発表や、情報・意見の交換を行います。

学会での研究発表には、「口頭発表」と「ポスター発表」があります。「口頭発表」では、広い会場で、発表者が壇上などに出て、主にスライドを使って研究内容を発表します。「ポスター発表」は、大きな用紙に研究内容をまとめ、掲示します。これらは研究者同士の交流のきっかけにもなる貴重な場です。

JCCG は治療の**「研究グループ」**です。情報や意見の交換もしますが、よりよい治療や診断の方法を確立するために、臨床試験（※）そのものを行っています。

学会で発表された情報をもとに JCCG が新しい臨床試験を計画することもあり、JCCG の臨床試験の成果が学会で発表されることもあります。日本では、日本小児血液・がん学会が科学的な議論の場を担い、JCCG が臨床試験を行い、両グループが車の両輪のように協力し合うことで小児がん治療推進の力を発揮しています。米国も日本と同じく学会と研究グループとがあります。

一方ドイツでは German Pediatric Oncology and Hematology（GPOH）というグループが小児血液・がん学会であると同時に小児がんの臨床試験を行い、成果を挙げています。それぞれの国や地域の医療体制や環境、歴史的な考え方を生かし、より患者さんのためになる運営方法をとることが理想的だと言えます。

※臨床試験：患者さんに新しい治療や診断を実際に受けていただき、その治療や診断の方法の有効性や安全性を科学的に確かめる研究のこと。

2018 年 比較腫瘍学常陸宮賞受賞
（ヒトの腫瘍と動物の腫瘍を比較研究する学問）

比較腫瘍学分野で優れた業績をあげた研究者に授与される「比較腫瘍学常陸宮賞」の第 21 回受賞者に、JCCG 監事で公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団理事長の中川原章医師が選ばれました。

同賞は、常陸宮正仁親王殿下が続けてこられた生物学やがんの研究を記念し、がん研究の奨励を図るため 1995 年に設置されました。毎年国の内外を問わず、原則 1 名が選ばれます。今回評価されたのは神経芽腫についての二つの研究業績です。

「なぜ自然に治る？」を追い続け

中川原医師は、九州大学医学部の学生だった頃、1 歳未満の乳児に発生し、骨髄などに転移しても自然に治る神経芽腫の存在を知り、そのしくみの解明を決意しました。米国ロックフェラー大学やワシントン大学でも学びながら仮説を立て、研究を続けました。千葉県がんセンター研究所では全国の小児がん診療施設とのネットワークを作り、全国規模の神経芽腫組織バンクと遺伝子診断体制を構築。鍵を握る遺伝子を見つけ、自然治癒のメカニズムを解明しました。

悪化する時の原因は？？ *MYCN* → N-CYM

組織バンクの検体を用いて遺伝子やゲノムの解析を行い、N-CYM という神経芽腫の悪性度を高めているタンパク質を発見しました。これはドライバー遺伝子（がんを引き起こす直接の原因となる遺伝子のこと）*MYCN* が逆向きに転写されて作られます。N-CYM は、ヒトとチンパンジーのみで現れる新規進化遺伝子産物で、転移を促進します。

同賞授賞式
5 月 29 日

中川原　章　医師

常陸宮正仁親王

授賞式は、東京都千代田区「クラブ関東」で常陸宮正仁親王殿下ご臨席のもと開催されました。

中川原医師は、「医学研究に集中すると、患者さんに触れることができなくなる。しかし患者さんのサンプル（血液や腫瘍の検体）には魂が込められていると思って仕事をしてきた。研究の成果が出るのは将来でも、病気にかかった子どもたちは待ったなしの状況。研究成果を臨機応変に治療現場に届けながら、小児がん・希少がんの克服に残りの人生を捧げたい」と語りました。

小児がんの子どもたちのサポートにご協力ください

JCCG＝日本小児がん研究グループは、全国の小児がん専門医や専門家で作る臨床研究のグループで、よりよい小児がん治療の開発を目指した様々な研究活動を行っています。

いただいたご寄付は、病気を正しく診断する「中央診断システム」の維持や、まだ完治の難しい病気の治療方法確立に向けた研究、治療後の長期フォローアップに使われます。

難しい病気と闘う勇敢な子どもたちに、「治った！」という明るい未来を贈ることが私たちの願いです。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

ご寄付はこちらへお願いします

郵便局・ゆうちょ銀行　郵便振り込み
口座記号　00850-5　口座番号 153506
加入者名　NPO　JCCG

JCCG HP より、クレジットカード寄付も可能です

http://jccg.jp

インターネットでのご寄付

クレジットカードで寄付

JCCG 事務局
〒460-0003 名古屋市中区錦 3 丁目 6 番 35 号 名古屋郵船ビル 8 階
TEL：052-734-2182　FAX：052-734-2183　E-mail：friend@jccg.jp

Special Thanks!
イラスト：かとーゆーこ（http://katoyuko.sakura.ne.jp/）　コピーライティング：石黒 佐和子
JCCG 自動販売機デザイン：有限会社 Sadatomo Kawamura Design

JCCG ニュースレターは、ご寄付をいただいた皆様や以下の支援団体様のご協力のおかげで発行されております